

# 明治期における〈加藤清正〉像

村橋 真由

はじめに

「治水の名人」「土木の神様」「猛将」。これらはいずれも、戦国武将加藤清正を称する際に用いられ、統治者としても、武人としても高く評価されてきたことを表す。

幼い頃から秀吉に仕え、賤ヶ岳の戦では「七本槍」の一人として武功を表し、肥後半国の領主となった後は、文禄・慶長の役で朝鮮に渡海し、日本軍の中心的存在としてその名を残す。関ヶ原の合戦では、徳川家康に味方し、結果として肥後一国の領主になる。やがて、徳川と豊臣、双方の対立が本格化する。豊臣恩顧の大名であった清正だが、彼の立場を明確にする史料は残っておらず、清正は五〇歳で急死するが、死因には諸説ある。死後、大坂夏の陣にて、豊臣家は滅亡する。加藤家は息子忠広が引き継いだか、その後まもなく改易される。

清正の研究の多くは、実像を明らかにすることを目的と

する。近年では、清正の忠誠心の高さを表す逸話「地震加藤」の事実上の有無を明らかにしようとした研究が注目されている。一方で、民俗学の視点から、清正を神として祀る信仰を調査した研究も成されており、研究の可能性は多角的に存在する。

清正はその死後、読本や草双紙、浄瑠璃、歌舞伎といった物語の世界で、史実とは別の〈加藤清正〉像が見出され、人々に受容されることになる。本論では、明治期に成立した作品を中心に、演劇と伝記において形成された〈加藤清正〉像を明らかにしたい。

## 一 演劇における〈加藤清正〉像

### 一 (一) 近世に成立した題材

まず演劇作品における展開を見ていきたい。江戸時代、歌舞伎をはじめとする芸能は、官憲の取締りによって絶え

ず制限を受けてきた。幕府は享保七年（一七二二）、封建制度と幕藩体制を維持するため、武家の家系について出版することを規制した。そのため、芝居興行でも、武士の名を实名で登場させることができなかつた。これと同時に、徳川家康のことはもちろん、徳川將軍家のことに關する事項を脚色することが禁じられている。こうして、戦国大名を物語化するところが困難になるかと思われたが、出版界においても演劇界においても大名の名前を書き換えるなどの対策を行い、劇化は続けられた。清正においては、加藤家が清正の息子の代に改易されており、加藤家へ配慮する必要がないという理由から、戦国武将の中では比較的題材としやすい存在であつたともいえる。なお、清正は「佐藤正清」と改名され、数々の作品に登場する。演劇の上演は江戸もしくは上方が中心であつたが、歌舞伎の場合は役者絵によつて芝居を直接観ない人々にも、作品内で表現された清正の姿が届いていたことが予想される。

清正を物語の中心に置いた劇作品としては、慶長の大地震のとき秀吉の身を案じて伏見城に真っ先に駆け付け、謹慎が解けたという「地震加藤」と、豊臣家の安泰を図つて豊臣秀頼と徳川家康を二条城で会見させる際に毒酒、もしくは毒饅頭で殺されたという「毒酒（毒饅頭）の正清」に、ほぼ二分されると言つてよい<sup>7</sup>。

清正が初めて一編の主人公として脚色され、寛政八年（一七九六）に初演された人形浄瑠璃『鬼上官漢土日記』に、朝鮮征伐中にも関わらず故国の危険を察知し急遽帰国した正清が、秀吉（作中では久吉）の御前で石田三成（作中では岸沢半官）の陰謀をくじく筋が見られる。このあたりが「地震加藤」の原型とされる。

歌舞伎作品では、翌寛政九年（一七九七）から上演された『けいせい遊山桜』の序幕で、地雷火から秀吉（作中では久吉）を守る場面が演じられ、これが「地震加藤」のあとで込みとされている<sup>9</sup>。

また、『けいせい遊山桜』では秀吉の御前で朝鮮征伐の作戦について小西と争論を繰り広げるが、最終的に清正の意見が採用される。この時秀吉は、清正に対して、「豊臣の姓を名乗ること」と「朝鮮出兵の先陣を任せること」を伝えて<sup>8</sup>いる。この筋立ては後述する『桃山譚』、『伏見街地震夜話』に引き継がれている。さらに同作品では、清正が毒酒を飲まされ、一度死んだように見せかけるが、実際には生存し曾呂利新作の謀反を見出す<sup>10</sup>逸話も描かれており、「毒酒（毒饅頭）の正清」の題材も盛り込んでおり、以降の清正を題材とした多数の演劇作品に多大な影響を及ぼすことになる。

## 一 (二) 合理的筋立てを目指した地震加藤

初めて伏見地震の出来事を主軸とした作品である『桃山譚』が明治二年(一八六九)に初演され、四年後に『増補桃山譚』が上演された。『増補桃山譚』では関白豊臣秀次の一件を前半に加え、九代目市川團十郎が清正と秀次の二役を演じた。この増補部分はずぐに取消しされたが題名は『増補桃山譚』のまま残る<sup>11)</sup>。当作品は別称「地震加藤」ともいわれ、伏見地震における清正の逸話を著名なものにした。

明治五年(一八七二)、東京府庁は演劇界つまり劇場経営者、狂言作者、俳優らの代表に対して「演劇は社会教化の道具で、貴人、外人らの鑑賞にも耐える上品な、史実を曲げない正確なものでなければならぬ」という旨を記した通達を出す<sup>12)</sup>。九代目市川團十郎は、これに賛同し、外国人や貴人の鑑賞にたえうる上品な作品を提供し、政府の期待に応えようとした<sup>13)</sup>。その典型となったのが、明治一三年、九代目団十郎主演で再演された『増補桃山譚』である。この上演では、大きく変化したことが二つ挙げられる。一つは役名が従来の佐藤正清から史実通りの加藤清正になったこと、もう一つは団十郎の扮装が、江戸歌舞伎の超人間的な存在を示す約束としての赤ッ面から、髭を蓄えた地顔に近くなったことである<sup>14)</sup>。さらに、大地震の場面は大道

具大仕掛けで観客にも地震の様子を体感させたという情報もあり、ここにもリアリズムを求めた演出が見られる<sup>15)</sup>。こうした効果は観客に、清正が伝説上の人物ではなく実在していたことを意識させただろう。

内容は、小西行長の讒言でしりぞけられていた清正が秀吉の信頼を回復するまでを描いており、人物の性格と筋の運びがはっきり押さえられるような合理的な脚本が目指された<sup>16)</sup>。朝鮮での厳しい戦いに関する述懐や申し開きの名調子は、九代目団十郎の当たり芸と言われ<sup>17)</sup>、多くの観客の心を掴んだ。御前で申し開く場面には徳川家康や前田利家も同席しており、「ほ、お、今に始めぬ清正殿の比類なき手柄の段々、「…」小西殿を町人と言ひしも、異国へ対する日本の恥<sup>18)</sup>」と清正の無実を肯定し、秀吉本人も以下の通り清正に言葉をかける。

まつた豊臣と名乗りしも、申訳相立つ上は、一旦の勘気を許し、五年が間朝鮮にて苦戦なしたる恩賞に、今日より改めて豊臣の姓を許し遣はす。唯今勘気を許せし上は、和睦破れし朝鮮へ、汝再び討手に向ひ、我が存念を果たしてくれよ<sup>19)</sup>

と、清正の言い分を全面的に信じ、再び信頼を寄せている。

謹慎の身から一転、大逆転を治め、次いで、清正を謹慎に追い込んだ小西らの讒言が露呈し、一気にその立場を追い詰める痛快な筋立てになっている。地震の折に真っ先に主君秀吉の元へ駆けつけた点だけではなく、朝鮮出兵の折は厳しい戦況下に関わらず、主命に従い続けた点も含めて、清正の忠誠心の高さが一貫して描かれている。合理的な筋立てにより、観客にも曲解されず、同じ（加藤清正）像が共有されやすかっただろう。

明治二四年（一八九一）に初演された歌舞伎、『伏見街地震夜話』は、「地震加藤」を世話にくだいた筋立てになっている。清正にあたるのは「蛇の目鮎の清蔵」、秀吉にあたるのが「遊女屋大阪屋の秀吉」である<sup>20</sup>。清蔵は秀吉抱えの遊女と出入の男の駆け落ちを匿うが、それを他の者から秀吉へ讒訴され、吉原の遊女屋大阪屋秀吉方への出入り差し止められる。匿った二人は心中し、清蔵は気を病むが、その後大地震について吉原に火事が起こった。清蔵は大阪屋へ馳せ参じて尽力し、その働きが認められ、秀吉の勤気は解ける。

早速によく駆けつけておれの心をやすめてくれた元の通り出入をさせ豊田の苗字もゆるして遣らう<sup>21</sup>

こうして清蔵は再び出入を許されるようになったが、この筋立てにより、劣勢の立場に追い込まれても、主君に對して忠誠を貫く清正の人物像が観客の心に刻まれた。

### 一（三） 伝統的な様式美を踏襲した毒酒の清正

文化四年（一八〇七）、「毒酒の清正」を題材に含む人形浄瑠璃『八陣守護城』が初演され、翌文化五年に歌舞伎化しており、明治期にも繰り返し上演された。豊臣秀頼の名代として將軍宣旨の場を訪れた佐藤正清は、自分に差し出された酒に毒が入っていると気付いていたが、將軍宣旨のための天盃であり、秀頼の身替わりになるという理由、そして正清の息子主計助と、三左衛門の娘雛衣は、不義密通の咎を春雄に助けられ正式に夫婦になったという柳もあって飲まざるを得ない<sup>22</sup>。以下は明治二年（一八六九）一月に森田座で上演された際の際本から抜粋したものである。

春雄の名代三左衛門、頂戴の上は正清、如何で辞退仕りませう<sup>23</sup>

春雄は徳川家康のことを指す。家康の名代である三左衛門が先に毒酒を飲んだことで、同じく家康に恩がある正清

も毒酒を口にするようになる。舞台一杯の船上で、菱皮かつらに赤ッ面、黒ビロードの着付に赤地錦の袴といった扮装の正清が、全身に毒が廻る中で、血を吐きながらも悠然と見得を張り続けたまま本城へ帰っていく場面は、歌舞伎の様式美が存分に生かされた演出で、この作品の見どころとされる<sup>24</sup>。大詰、本城の場で、正木・児島という二人の優秀な軍師を味方につけ、豊臣家の行く末を託して死んでいく。明治期に活歴物が登場してからも、江戸期に制作された『八陣』は正清を主人公として何度も再演される。史実が重要視される一方で、歌舞伎が本来行っていた誇張された演出を好み、荒々しく屈強な類型化された正清を好む観客も多く存在したのだろう。忠誠心の高い人物としての描かれ方は「地震加藤」を題材とした作品と共通している。明治八年（一八七五）には歌舞伎『実成みのりあきせい穰せう清正せいせい伝記』が上演された。この時は、江戸時代の遺風で、加藤清正は佐藤正清であった。明治二七年（一八九四）に『清正忠誠録』と改題し再演され、役名が佐藤正清から実名の加藤清正になった。九代目団十郎が正清を演じており、活歴物を目指したことは間違いない。通称「毒饅頭の清正」と言われる。正清が家康に毒殺されるという筋は『八陣』と同じであるが、『誠忠録』では『八陣』のような毒と知りつつ飲まなければならないような筋は必然性がないと批判され

ている<sup>25</sup>。この演目が当たれば、毒殺に関わる逸話は『八陣』の誇張された清正像から、より実象に近い『誠忠録』の清正像に更新されていたかもしれないが、結果として、『誠忠録』は正清が毒殺されたという俗説を広める役割は果たしても、『八陣』から清正の印象を塗り替える程の影響はなかった。

## 二 伝記における〈加藤清正〉像

### 二（一） 記録と物語

明治期の清正伝記を検討する前に、清正の死後、いつ頃、いかにして清正の伝記が成立し、いかに展開してきたのかを確認したい。江戸時代初期、徳川幕政によって国内が安定化すると戦国武将の伝記の編輯が行われた。特に一人の武将の生涯に焦点を当てた武将伝は側近者により書かれたものが多く、史料価値が大きい<sup>26</sup>。清正も例外なく、その家臣らによる記録が伝記として編輯されている。中でも、清正伝記の中心的存在であったのが、写本『清正記』である<sup>27</sup>。著者については、本書の「此書の起り」から、加藤美作、古橋又助、下川兵太夫、古橋清助等が書いておいた記録を古橋左衛門又玄が編輯したことが分かる<sup>28</sup>。いずれの人物も加藤家の家臣であったとみて間違いない。六作とも成立の時期はほぼ未詳であるが、前述した武将伝が頻

出する元和・寛永のあたりとされる<sup>29</sup>。なお、『清正記』は、一次史料と合致する情報も多く、元々の著者が側近者であり、清正という人物の生涯を記録することを目指して成されたものと見られる。しかし、偽文書を引用している箇所も確認できるため、これを根拠として史実を構築するには注意を要する<sup>30</sup>。

さて、当初は歴史の記録として生み出された伝記が、読本や草双紙の他文芸に移転したことにより、史実と乖離した逸話が普及していく流れとなる。このことを踏まえて清正をめぐる逸話の受容を考えると、とりわけ読本『絵本太閤記』の存在が大きい。『絵本太閤記』は七編から成り、一七九七年から一八〇二年に渡って刊行された読本である。豊臣秀吉の出世譚を題材にした本書は、『絵本曾我物語』をして「大いに世に行はる」と言わしめる程の人気を獲得した。加えて、浄瑠璃や歌舞伎の演目にも用いられたことで、一層知名度を高めることとなった。一編は一二巻で構成され、各巻の中でさらに章を区切った項目題が付され、場面や主体とする人物を転換しながら、物語が進んでいく。清正を主体とする章が複数設けられていることから分かるように、物語の展開に欠かせない人物とされていた。劇の題材となった四編巻一は秀吉を主体とする話であり、劇化当初は清正が登場しない形で台本作成と上演がなされ

たが、後ほど歌舞伎において清正登場の趣向が加えられた<sup>31</sup>。この経緯からも清正の存在感の高まりが窺えよう。

以上、近世に清正が描かれた文献について簡潔に説明したが、これらは果たして明治期にどのように活用され、書き換えられていったのだろうか。

## 二(二) 近世の遺風を継ぐ草双紙

草双紙とは、江戸中期から後期にかけて江戸で刊行された大衆的絵入り小説のことを指す。見開き一頁を使って絵が描かれ、その端や隙間に絵に準じた説明が成され、時系列に沿って展開されていくものだ。読者の対象を子ども、もしくは家庭で音読するように設定している<sup>32</sup>。草双紙は明治期に衰退の一途を辿っていたが、当然すぐに消滅した訳ではない。

本節では、江戸時代から続く草双紙は明治期に入ってからどのように清正を描いていたのかを見ていきたい。以下、本章で取り扱う草双紙について、成立年次順に列挙する。明治期に刊行された草双紙の総覧は存在しないため、清正を主人公とした草双紙について、総数は不明ではあるが、管見の限り搜索・収集しえた六作を以下に列挙する。書誌の記載にあたっては、書名、書型・冊数、刊年、出版地、著编者、画工、出版元、印刷形態、丁数の順に記す。



- ① 『清正一代記』 中本・二冊。明治一五年（一八八二）御届。東京。永島虎重録、森本順三郎編。永島孟斎。森本順三郎。木版。一〇丁・一〇丁。
- ② 『加藤清正一代記』 小本・一冊。明治十九年（一八八六）四月発兌。東京。菅谷与吉。画工名なし。菅谷与吉。銅版。二〇丁。
- ③ 『絵本実録加藤清正一代記』 小本・一冊。明治一九年（一八八六）八月御届。東京。牧金之助。画工名なし（表紙に「梅堂筆」とある）。牧金之助。銅版。一一丁。
- ④ 『清正群功記』 中本・一冊。明治二年（一八八九）一〇月出版。東京。著者名なし。画工名なし。尾関トヨ。銅版。一〇丁。
- ⑤ 『絵本実録加藤清正一代記』 中本・一冊。明治二三年（一八八九）一月出版。東京。牧金之助。画工名なし。牧金之助。銅版。一〇丁。
- ⑥ 『絵本実録加藤清正一代記』 中本・一冊。明治二四年（一八九一）一二月訂正再版。東京。牧金之助。画工名なし。牧金之助。銅版。一〇丁。

それでは内容を見ていこう。手始めに、史実では謎に包まれた清正の出自に関する逸話が、伝記ではどのように描

かれているか確かめたい。加藤家は大戦冠、つまり藤原鎌足の子孫であることが前提として記される。祖父は加藤因幡守信清であるが、①では信清は犬山の城主であり、⑤⑥では尾州の城主と記されている。また、全てにおいて、由緒正しいはずの加藤家が尾張中村で庶民のような暮らしをするように至ったのかの背景が不明である。この因果関係が不明であると、記述全体の信憑性を落としてしまうだろう。これはつまり、草双紙では、論理的な説明は優先されないということの意味する。繰り返しになるが、草双紙は子ども向けに作成されるもので、史実に精通した読者を対象としていない。詳細な記述よりも印象強い言葉を並べること、読者の興味を惹き続けることが重要である。「大戦冠鎌足公の後胤」のような、大抵の読者が知っており、印象強い言葉と、「十代尾州犬山の城主」や「加藤因幡守」のような固有の呼称を使うことで、詳細は知らなくとも、清正の出自が明確であるかのような錯覚を抱かせる。このようにして草双紙では、曖昧な情報の中に、真実らしい場所の名前、人物名をちりばめることで、実在した人物について正しく歴史を描いているように見せかけている。それでは、清正自身はどのような人物として描かれたのだろうか。草双紙①からみていく。清正は、幼少期を秀吉の元で過ごし、秀吉が長濱城の城主であった時には、清正が領内を

巡見していた際に、木村又蔵と井上大九郎の争闘を諫め、二人を家臣にする。この件は②③④でも確認できるが、『絵本太閤記』二編三巻「加藤虎之介長濱領巡見」の段に、より詳細に記されている。二人が、清正に惚れ込んで臣下にして欲しいと願う話は、若いうちから清正にはそれだけの人徳が備わっていたことを示す有効な題材であったのだろう。

その後は、数々の合戦における清正や家臣木村又蔵の武功が取り上げられる。清正は、明智の家臣但馬守や、徳川家康の家臣本田忠勝、九州の強将新納武蔵守らと一騎同士の戦いが、いずれも勝利している。武人としての強さだけでなく、本田忠勝との死闘の末勝利した際には、忠勝の勇士を称賛し、命は奪わず、再会を約束するという人情味溢れた人柄も覗かせる。

朝鮮征伐の際は、真つ先に首都・漢城を落とす、朝鮮の二人の王子を捕縛し、明の軍勢三十万に勝利するなど抜群の軍功をあげる。また、「虎退治」の描写もあり、小姓が虎に襲われ、それに怒り、槍で虎を仕留める筋立てとなっている。そして、今回取り扱った草双紙の中で唯一関ヶ原の戦いに関して触れている。「慶長五年九月関ヶ原の一戦には関東へ御味方して小西の居城宇土八代の両城を攻落して所有となし肥後五十四万石を領す」の一文のみであるが、

清正が一戦国武将として栄華を極める様相が確認できる。この物語において清正は、高い武力を持ち、人徳もあり、忠誠心も強い、武将として完璧な人物に描かれた。

②③④⑤⑥についても結論はほぼ同じであるが、①と比べると、各事項の説明が断片的なものになり、清正の武功が強調される。まず、②と③はほぼ同文である。③の方が②より丁数が少ないため、②で書かれていた内容が省略されている部分もあるが、絵に関して、構図がかなり似通っている。板元が異なるため、江戸期に成立した同じ草双紙を参考に行っている可能性が高いが、種の特定には至っていない。また、⑤と⑥も途中まで同文であるが、朝鮮征伐から⑥の方は記述が少なくなる。

ここで、①を除いた五作は関ヶ原の戦いに関して全く言及していない点に注目したい。江戸時代は徳川家に関する事項を脚色することが禁止されており、また、清正が最終的に豊臣家を滅ぼした徳川方に就いたという事実は、清正を忠義に厚い人物に描こうとすると矛盾を生ぜしめるため、関ヶ原の戦いを進んで描く道理がなかったことによるものと考えられる。よって銅版草双紙の内容は、基本的に江戸時代に成立していた話に基づいており、新しく作り直すことなく、そのまま踏襲したと見られる。明治期に成立した草双紙は、前時代の名残が色濃く残ったものだった。



①②③④⑤⑥をまとめると、それぞれで一致する情報は多くあるが、全ての草双紙に共通して取り上げられている合戦や逸話はほとんどない。例えば、⑤と⑥は長篠の戦において、清正が武田の家臣座光寺与一に打勝つ場面を描くが、①②③④は長篠の戦に関する記述がない。また、賤ヶ岳の戦は清正が「七本槍」に数えられる有名な合戦だが、①と④では描かれて、②③⑤⑥では描かれない。このように取り上げられる合戦自体が異なっており、清正の軍功において外せない逸話というものが存外少ない。このことを勘案すると、第一に、前述したように明治期の草双紙の種は、決まった底本があったのではなく、読本をはじめとした様々な近世書物の中から話を寄せ集めて作られたことを意味しよう。第二に、朝鮮征伐の折、清正が朝鮮に渡海して朝鮮の要所を落とすという動向は必ず見られるので、朝鮮征伐での活躍というのは、清正の印象の中で確固たるものであったと言えよう。また、虎退治についても、直接の記述はなくとも、清正が虎に鎗を向けている絵は全てに見られるため、虎退治の印象もかなり強いことが窺える。清正を描く上で外せないものは、朝鮮征伐における活躍と、虎退治だったといえよう。

草双紙は、対象が子どもや読み書きのできない家庭であったという点からして、清正のことを知らない人々に清

正のことを教える啓蒙的な役割を果たしていたとされる。草双紙を通して（加藤清正）像を獲得した人々は、忠義が厚く武勇に優れた、まさしく猛将として印象付けられたのである。

## 二（三） 史実の再評価を成した伝記

坪内逍遙『小説神髓』（一八八五～一八八六）によって近代文学の在り方が提示され、勸善懲惡主義を否定し、人情の模写を主とする人情世態小説が発せしていく<sup>33</sup>。これに伴い伝記の述作も大きく変化する。近代的伝記の出現は明治二〇年（一八八七）前後といえる。それまでは幕末以来の実録風あるいは戯作的手法によるものであったが、明治中期以降、実証的、または評論的な個人伝記となった<sup>34</sup>。これにより、清正の生涯を描いた伝記の性格も大きく変化を遂げる。本論では、近代伝記小説誕生の過渡期に手掛けられた江見水陰による伝記『加藤清正』と、近代を代表する歴史作家、山路愛山の著作『加藤清正』の二作に注目したい。

明治二三年に内務省許可、二七年に発行された、江見水陰『加藤清正』（『少年文学』第三二編、博文館）にその兆しが見られる。博文館は、雑誌『太陽』を発刊して多くの人物評論・人物伝を掲げたほかに一連の伝記叢書を出した

が、「少年文学」シリーズはその名の通り、少年向けに制作された叢書の一つである。作者の江見水陰は明治・大正期に活躍した小説家で、冒険小説、探検記を得意としていた<sup>35</sup>。本作『加藤清正』を執筆するにあたって水陰は、附記にて『清正記』を参考にしたことを明かす。水陰は『清正記』の史料的价值を冷静に分析し、著者が加藤家の家臣であるということは、清正眞員の偏った内容であることを認めた上で、少年向けに清正を紹介するのにふさわしいと判断し、これに材をとったという。内容は、おおむね『清正記』に記されている事項をそのまま用いているが、明治版現代語訳というだけでなく、所々で水陰自らの見解が為される。例えば、清正は慶長四年（一五九九）、関ヶ原の一年前に家康の養女を妻として迎えるが、この事項に関して『清正記』では、

主計頭清正は家康公へ属し御馳走申されければ家康被仰けるは清正は妻女なし我等娘をまいらせんとて水野泉州息女を御養女に被成遺候也<sup>36</sup>

としか、述べられておらず縁談の目的やそれに纏わる思惑について、定かな情報がない。これに対し、水陰は以下のように考察している。

家康深謀あり、或は天下を吾物にするの思慮なきかと、人々疑ひぬ。或は然らん、されども家康は何処までも平和を粧ひ、他意あるを示さざりき。爰に家康が水野和泉守の息女を養女にして、清正に娶合せたる一事大いに注目すべきの点なり。家康が清正を恐るべきの強骨漢、これを味方にせではと思ひて、手段の爲めに斯くはからひしか。清正はそれを知らざりしか、知りてわざと娶りしか<sup>37</sup>。

家康の人物像として、腹黒さ、計算高さをほのめかしているが、この記述は、徳川支配の世から二〇年が経過し、旧幕府に与つた有力人物の力あるいは徳川や旧藩主に対する奉公の発想が失われてきた頃であるとともに、江戸時代にある程度距離を置くことができるようになった明治二〇年代という時代だからこそ、可能となった記述だろう。清正の立場に関しては、「清正はそれを知らざりしか、知りてわざと娶りしか」と自身の見解を示さず、判明していない史実に脚色を加えず、距離をとる姿勢も窺える。このように、冷静な視点で歴史を描く中で、清正はどのような人物として描かれたかという点、水陰自らが指摘している通り、本作が典拠とした『清正記』は清正に縁あるものが記

したもので、大方の出来事において清正を美化する傾向があり、それがそのまま作品に引き継がれている。水陰は『加藤清正』の「総論」をこう締め括る。

嗚呼動に発しては偉大の遠征家たり。静に座しては無二の内治家たり。外敵に衝りては鬼上官と恐怖せられたれども、赤誠一意、秀吉の恩に報ずる處、情を知るの武士とは、それ清正の謂ひならんか<sup>38</sup>。

清正という人物は、武人としても、統治者としても優れていたとし、また、秀吉への忠誠を貫いた人格者としても肯定する。水陰は、典拠とした文献を提示し、独自の見解も交えつつ、改めて清正という人物の再評価を行う近代的手法をとっている。しかし、読者に伝えたい清正の人物像というのは、近世の遺風をひく草双紙とあまり変わらない。草双紙で重要視された勇猛果敢な印象に加えて、政治家として優れた面も強調され、完璧な人物として描かれた。読者にはまさに英雄として印象付けられたのではないだろうか。

次に、山路愛山による『加藤清正』（民友社）について触れたい。本作は明治四二年に出版された。山路愛山は、明治・大正時代のジャーナリストで、人権運動と平民のた

めに多くの歴史研究書を残しており、本作も伝記というよりは、研究書に近い<sup>39</sup>。典拠とした文献は『清正記』だけでなく、『黒田家記』や『毛利家記』など江戸時代の日記や家伝を他にも多く取り上げており、文献を引用した際は文中に括弧書きで記している。出来事を時系列順に淡々と記述し、合戦や事件の経過を説明しそれらに関する愛山の見解が述べられる。清正の動向だけではなく、秀吉や家康をはじめとする他武将の動向も詳細に記され、出来事の全体像を把握することができる。例えば、石田光成と清正の関係性について考察している。

石田と清正が始終仲悪しかりしは隠れなき事実なれども、是は双方に言分ありて、どちらが正しとて団扇を上げ兼ねる問題なり<sup>40</sup>。

これに続き、双方の立場を論じており、愛山の歴史を俯瞰する姿勢が見受けられる。正しい歴史を読者に啓蒙することは愛山が意図していたことであり、その一つがこの『加藤清正』であった。では愛山にとって正しい（加藤清正）とはどのような人物だったのだろうか。家康の養女を娶ったことに関して、前述の通り水陰は清正の心情について断言することを避けたが、愛山は以下のように自説を展開す

る。

徳川氏の豊臣氏に対する心事は路人も知るべし。太閤の旧臣、正則、幸長、清正の徒、何でう之を覚らざるべき。之を覚りながら知らぬ顔を粧ひ、何処までも家康の機嫌を取り、秀頼の成長を待ちし彼等の用心は唯だ総てを犠牲にして平和を買ひ以て雄飛の時期を待つに在りしのみ<sup>41</sup>。

清正は豊臣家への忠誠を違えておらず、秀頼が成長した時に、豊臣家が復権するために、権力を拡大する家康にあえて逆らわず、力を温存していたと主張する。

史実で清正の動向が明らかにされても、その動向がどういった目的や意識の元で行われたのかということを実証することは難しいが、愛山はそこに挑戦した。類型化されてきた〈加藤清正〉に拠らず、複数の文献にあたり、分析を行い、新しい〈加藤清正〉を紡ぎ出した。愛山が明らかにした〈加藤清正〉は、生涯に渡って、豊臣家を想い、尽くし続けてきた人物であった。愛山によって、清正の人柄がより詳細になり、より人情味を持った〈加藤清正〉となったのである。

おわりに

明治期における加藤清正を題材とした作品で代表されるのは、「地震加藤」を題材とした『増補桃山譚』と、「毒酒の正清」を題材とした『八陣守護城』の二作品であった。『増補桃山譚』では、実在した清正を再現することを目指し、それは観客にも史実を意識させる効果があっただろう。その中で清正は忠義に厚い人物であることが強調された。

物語全体を通してこの人物像が一貫して描かれたことで、人々に忠誠心が強い人物としての〈加藤清正〉像が刻まれた一方で、近世の遺風をひく超人的な清正も好まれた。『八陣守護城』は、歌舞伎の様式美を活かした演出で、長い期間に渡って多くの観客を獲得してきた。ここにおいて清正は、豊臣家を守るために尽力する姿だけでなく、毒にも屈しない屈強な精神と身体を持つ人物として描かれるようになった。したがって、明治期における演劇作品では、実在した忠義に厚い人物としての〈加藤清正〉像と、超人的な強さを持つ伝説上の人物としての〈加藤清正〉像の両方が併存したのである。

明治期における草双紙では、「敵討一代記」や「武者其他実録物」が主流を為し、清正を主役とした作品も出版される。草双紙は子ども向けに作成されるもので、論理的で詳細な記述よりも、簡潔で印象強い言葉を並べることで、

読者の興味を惹き続けることが優先された。明治期に成立した草双紙、六作品を調査した結果、明治期の草双紙は、決まった底本があったのではなく、読本をはじめとした様々な近世書物の中から話を寄せ集めて作られたものと見られる。また、清正を描く上で外せないものは、朝鮮征伐における活躍と、虎退治であり、武勇に優れた猛将としての清正が強調されたのである。なお、草双紙で描かれてきた逸話の数々は講談にも導入されており、屈強な清正像は耳を通してさらに補強されていた<sup>42</sup>。

一方、近代化に伴い、実証的、評論的性格を有するようになった伝記においては、歌舞伎を始めとした物語作品によって浸透していた清正の毒殺説を訂正する記述も認められる。例えば、江見水陰『加藤清正』は、対象を子供向けとしているものの、史実を意識している点で草双紙とは大きく性格を異にし、『清正記』を史料として用いつつ独自の見解も交え、改めて清正という人物の再評価を行っている。作中では、草双紙で強調された勇猛果敢な姿にとどまらず、政治家として優れた面も前景化され、さらなる英雄として描かれている。また、山路愛山はさらに多くの文献にあたり、より実証的な姿勢から、超人的な強さを持つ清正ではなく、豊臣家に尽くし続ける清正の意志を強調した。これらはずまり、伝説としてではなく、人間としての

（加藤清正）を再評価したということである。

時代が進むと、富国強兵、軍国主義の影響は強まり、とかく手柄のあった武将の武勇談がもてはやされるようになる<sup>43</sup>。文禄・慶長の役に際して、朝鮮に渡海した武将たちの中でも、二王子を捕縛した手柄を持つ清正は、大陸侵攻の中心的人物として再発見される。昭和七年（一九三二）から採用された国定教科書『新訂尋常小学唱歌 第五学年用』には、唱歌「加藤清正」が掲載されている。一番の歌詞では七本槍の一人として、二番では明の軍勢百万余を退けた英雄として歌われていた<sup>44</sup>。つまり清正は、忠臣愛国を育む教材として利用されたのではないだろうか。明治期における（加藤清正）像は、虎をも倒す猛将で、豊臣家の忠臣であったが、日本の帝国主義が高まりを迎えていく中で、この像がどのように変化し、また、利用されていったのかについては後考を俟ちたい。

#### 注

1 『加藤清正の生涯—古文書が語る実像—』熊本日日新聞社、二〇一三年、一五〇頁。

2 『国史大辞典』第三卷、森山恒雄「加藤清正」項、四一六頁。

- 3 福田正秀『加藤清正と忠廣―肥後加藤家改易の研究―』、プ  
イツソリューション、二〇一九年。
- 4 福西大輔『加藤清正信仰―人を神に祀る習俗―』、岩田書店、  
二〇一二年。
- 5 佐藤至子『江戸の出版規制―弾圧に翻弄された戯作者たち  
―』、吉川弘文館、二〇一七年、一五頁。
- 6 金昭賢『寛政期の人形浄瑠璃における加藤清正像―『千里竹  
雪曙』を中心に―』（早稲田大学演劇映像学会編『演劇映像』  
五六号、二〇一五年）、一頁。
- 7 前掲金昭賢『寛政期の人形浄瑠璃における加藤清正像―『千  
里竹雪曙』を中心に―』、一頁。
- 8 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館『演劇百科大事典』第二  
巻、渥美清太郎「加藤清正物」項、平凡社、一九六〇年、六六頁。
- 9 前掲渥美清太郎「加藤清正物」項、六六頁。
- 10 前掲渥美清太郎「加藤清正物」項、六六頁。
- 11 渡辺保『九代目団十郎』小学館、二〇一八年、二八二頁。
- 12 馬場順『人と芸談―先駆けた俳優たち―』、演劇出版社、  
一九九九年、四二頁。
- 13 田口章子『歌舞伎と人形浄瑠璃』、吉川弘文館、二〇〇四年、  
一七八頁。
- 14 野口武彦『他』『日本文学史』第一巻、大笹吉雄『演劇の変革』、  
岩波書店、二〇一二年、一六〇頁。
- 15 前掲渡辺保『九代目団十郎』、二八三頁。
- 16 前掲田口章子『歌舞伎と浄瑠璃』、一七九頁。
- 17 服部幸雄『他』編『歌舞伎事典』、永平和雄『増補桃山譚』項、  
平凡社、二〇一一年新版、二六一頁。
- 18 河竹糸女補修『黙阿弥脚本集』第七巻、河竹黙阿弥『増補桃  
山譚』、一九二〇年、一四六頁。
- 19 前掲河竹黙阿弥『増補桃山譚』、一四七頁。以下、引用にあつ  
ては、旧字は現在通用する字体に改め、また、ルビは省略した。  
全ての引用文で同。
- 20 飯塚友一朗『歌舞伎細見』、第一書房、一九二六年、二二二頁。
- 21 竹柴金作『伏見街地震夜話』、松花堂、一八九一年、三四頁。
- 22 前掲渡辺保『九代目団十郎』、二七一頁。
- 23 渥美清太郎編『日本戯曲全集』第二八巻、佐川統太『八陣守  
護城』、春陽堂、一九二八年、三三七頁。
- 24 富沢慶秀、藤田洋監『最新歌舞伎大事典』、富岡泰『八陣守護城』  
項、柏書房、二〇一二年、五〇二頁。
- 25 前掲渡辺保『九代目団十郎』、二七二頁。
- 26 『国史大辞典』第九巻、大久保利謙「伝記」項、九四五頁。
- 27 阿部一彦『近世初期軍記の展開』、新典社、二〇〇九年、五六頁。
- 28 武藤巖男、宇野東風、古城貞吉編『肥後文献叢書』二、古橋  
又玄『清正記』、歴史図書社、一九七二年、三三頁。
- 29 前掲阿部一彦『近世初期軍記の成立』、六〇頁。
- 30 大浪和弥『加藤清正と畿内―肥後入国以前の動向を中心に―』  
（山田貴司編『加藤清正』シリーズ織豊大名の研究二、戎光祥  
出版、二〇一四年、七五頁）によると、賤ヶ岳の戦功に対する  
秀吉の感状は、福島正則宛をはじめ現物が五通、片桐且元宛な  
どの写しが三通、いずれもほぼ同文で確認できるが、清正宛の  
ものは存在が確認できていない。『清正記』にこの時に出され



た秀吉感状と言われるものが収録されているが、文面が全く異なっているため偽文書とされる。

- 31 古井戸秀夫編『普及版歌舞伎登場人物事典』、児玉竜一「佐藤正清」項、白水社、二〇一〇年、三九三頁。
- 32 『国史大辞典』四卷、鈴木重三「草双紙」項、七四五頁。
- 33 平岡敏夫『明治文学史の周辺』、有精堂、一九七六年、六四頁。
- 34 『国史大辞典』第九卷、大久保利兼「伝記」項、九四五頁。
- 35 『国史大辞典』第二卷、伊狩章「江見水陰」項、三七三頁。
- 36 前掲古橋又玄「清正記」、五六頁。
- 37 大橋新太郎編『少年文学』第三編、江見水陰「加藤清正」、博文館、一八九四年、一〇八、一〇九頁。
- 38 前掲江見水陰「加藤清正」、一四三頁。
- 39 『国史大辞典』第一四卷、今中寛司「山路愛山」項、一四六頁。
- 40 山路愛山「加藤清正」、民友社、一九〇九年、七九頁。
- 41 前掲山路愛山「加藤清正」、一七一、一二二頁。
- 42 例えば今村次郎編『講談長篇加藤清正』(博文館、一九一七年)では、明智の家来、但馬守と一騎打ちになり、清正が勝利した逸話が記されており、「清正はどれ程強かったものか底が知れない」と称されている。
- 43 矢野四年生『伝記加藤清正』のべる出版企画、二〇〇〇年、一四八頁。
- 44 前掲矢野四年生『伝記加藤清正』、一四七頁。